

老人喰い —— 高齢者を狙う詐欺の正体

(ちくま新書) 鈴木大介著

三役系の編しのロジック

三役系とは3人のプレイヤーが別々の役割を演じるもので、警察などが「劇場型詐欺」というのも分かる。プレイヤーたちはまるで劇団員だ。では、このシナリオによって被害者はどんな心理に追い込まれるのか。より踏み込んで、プレイヤーたちの狙いを見ていこう。

まず基本の構図は、ターゲットとなる高齢者の家族（たとえば息子）が、誰かに「とりかえしのつかない迷惑をかけた」というもの。3人のプレイヤーには、それぞれ「ターゲットの家族の身内である“加害者”」「“被害者”の父親」、「第三者」たとえば、(鉄道警察役)の配役が割り当てられる。

息子役はターゲットに電話をかけて名乗るだけで、ほとんど話す必要がない。むしろ、話が長くなるほど、本当の息子なのかを疑われてしまうため、ただ失う社会的生命におののいて、かすれ声で泣きじゃくっている様を演ずる。自分の罪の重さに耐えかね、まともに話すこともできない状態だ。

被害者役は別名「キレ役」。とにかく被害を受けたことに激怒していて、恫喝(どうかつ)の声で畳み掛ける。法的制裁だけではその憤りを収められず、私的制裁に及びかねない迫力だ。心情的には「金で解決するつもりはない」ほどの怒りを演出する。

最後の鉄道警察役は、追いつめられたターゲットにとっては「救いの手」だ。三役の中で唯一冷静であり、荒ぶる被害者役をなだめつつ、示談で済ませられるのであれば、済ませてもいい。もし逮捕となればこれで失う社会的信用は計り知れないが、どうにか示談で収めれば逮捕も失職も免れることができると提案して「くたさる」。

このままでは警察で取り調べを受けて留置され、会社も欠勤し、バテてクビになる。その後は刑務所での懲役だ。だが、もし示談金を用意してこの場で話を収め

ることができれば、その社会的ダメージを回避することができる。さあどちらにしますか？ そんな判断を、ターゲットに迫るわけだ。

三役系のシナリオはこの配役が変わるだけで、非常に多くのパターンがある。

「同僚の奥さんと不倫をして妊娠させた息子」と「当事者の同僚」と「仲裁役の弁護士」が配役され、「示談にするか、ことを表沙汰にして会社をクビになるか」と迫ったり、「会社の金を横領した息子」「横領によって不渡りを出しそうな経営者」「なんとか社員の家族から繋ぎ資金をお借りして不渡りだけは回避しようと提案する専務」が配役されたり、「交通事故を起こした息子」「車を当てられて流産してしまった妊婦の夫」「呼び出された弁護士」などなどだ。

いずれにせよ、基本的に騙しのロジックは、共通していると詐欺の現場プレイヤーは口を揃える。

ポイントは、息子役以外の二役が代わる代わる電話口に出ることで、ターゲットを混乱させることだ。絶体絶命のピンチと救いの手を同時に投げかけることで、むしろターゲットの側から「お金を払わせてください。なんとか息子を助けてやってください」とお願いするような場面に持ち込むのが、この三役の妙技と言える。

高齢者を狙う「騙り調査」の実態

どのように調べるのか。ここで使われるのが「騙(かた)り調査」という手段だ。例えば 国勢調査、地元警察の防犯のための調査、地元福祉事務所による高齢者の居住状況や安否調査などを装って自宅に電話がかかってきたらどうだろうか？

ある穏やかな午後、高齢者宅の電話が鳴る。出た電話の相手は、穏やかな声の男性だ。

「お忙しいところ申し訳ございません、こちら〇〇警察署の生活安全課ですが、ただいま 高齢者の防犯のためにいくつかのご質問と安全確認をさせて頂いております。お時間よろしいでしょうか？」

あらまあ、ご丁寧にありがとうございます。電話口で頭を下げる高齢者の姿が目に見えるようだが、これが騙り調査の手口だ。

あくまで相手は公的機関名を「騙り」、高齢者の安全確認や社会的な調査業務のためにと言って電話をかけてくるのだ。素直に応じてしまうのが普通であって、

この時点で疑ってかかればむしろ「猜疑心まみれの老人」と揶揄されるかもしれない。だが、これが甘い。

こうした調査のことを、詐欺の現場では「下見調査」といい、名簿屋自身が行ったり、詐欺のプレイヤー引退者が独立した「下見屋」として調査業務を委託されることもある。そしてそこで聞き取られるのは、すべて詐欺組織の要請に沿ったものだ。

例えば……

- ・居住形態は持ち家か賃貸か。
- ・独居なのか、家族と同居か。
- ・配偶者と死別しているなら、その名前、死亡年月日はいつか。
- ・独居であれば、子供や家族・親族とはどのぐらいの頻度で連絡を取っているのか。
- ・経済的な不安はないか。不動産や証券などの他に現金の持ち合わせはどのぐらいあるのか。
- ・金融資産は現金で所持（タンス預金）しているのか、銀行に預けているのか。
- ・不安なことを相談できる相手は身近にいるか。
- ・在宅介護サービスなどを受けているか。受けているなら利用頻度や形態はどのようなものか。
- ・健康不安はないか。判断力が低下していたり、認知症のリスクを感じることはあるか。
- ・悪徳商法などの被害に遭ったことはないか。
- ・緊急時に連絡を取るべき子供などの氏名、住所、連絡先、勤務先や所属部署はなにか。

かなり踏み込んだ内容だが、あくまで下見屋は公的機関の名を騙って「こんな不安はありませんか」といった体(てい)で聞き取っていくのだから、まずい。なぜなら、様々な不安を抱えている高齢者こそが、詐欺のターゲットだからだ。そして最悪なことに、下見屋業務の経験者が言うには「詐欺のターゲットになりがちな高齢者」ほど、そのすべてに対して非常に丁寧に答え、なおかつ聞いてもいないことまで自発的に長時間に渡って話してくれるというのだ。

これは、独居で孤独と不安を抱えた高齢者の心理だろうが、それこそが下見屋の思う壺(つぼ)ということになる。また、こうして公的機関の名を騙った調査の電話をかけることそのものは、即座に大々的な捜査の対象となるようなことはない。下見屋経験者は「丁寧なはずら電話みたいなもんですよ」と言う。

